北九州市立則松中学校

【学校ホームページアドレス】
www.kita9.ed.jp/norimatsu-j

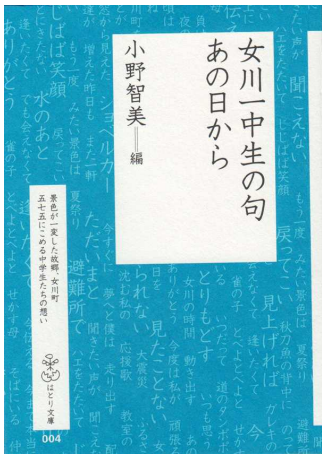
ジャガイモ

校長通信　№２９３

令和６年　２月　５日

「　百人の一歩③～福岡県朝倉市高木地区～　」

校長　江　口　　満



【前号からの続き】2014年(平成26年)8月、トラックで人生一冊を運んだ４回目、東日本被災地訪問最後の年。私は宮城県女川町立女川中学校を訪問した。その時、当時の女川中学校Ａ校長から一冊の本「女川一中生の句　あの日から　(小野智美　編)」を託された。その一部を皆さんに紹介する。

【上】2014(平成26年)8月27日撮影。「第4回人生一冊プロジェクト」の取組として宮城県女川町立女川中学校を訪問。震災資料館に案内され、そこで出逢った一つの句「今思う　もっと一緒に　いたかった」。私はその場から離れることができなくなった。【左】当時の女川中学校Ａ校長から託された一冊の本「女川一中生の句　あの日から」

東日本大震災直後の2011年(平成23年)5月と11月に行われた２回の国語科授業。女川第一中学校の全校生徒約200人が、俳句を作った。津波で家族を、家を、故郷の景色を失った生徒たちが、季語にこだわらず、五七五に、心の内を織り込んだ。当時、指導された国語科Ｓ先生は、次のように振り返っておられる。

「あのころは、生徒に『がんばれ』と言いながら、心のどこかで『無理しなくていいぞ』とも思ったりして、いつも迷っていました。そんな中で生徒に俳句を作らせるなんて…。自分自身、折れそうな心を奮い立たせて教室に向かいました。何を書いてもいい、書けなくてもいい、どんな授業になってもいい…。君たちは真剣に取り組んでくれました。作品をのぞいてみて、涙をこらえるのがやっとでした。というか、泣きました。君たちは誰に向かって俳句を書いたんだろう。自分に向けて？それとも…。少なくとも、国語の課題とういう次元では、ないように思います。作文にすれば、何十枚書いても、おそらく表せないあのときのあの気持ち。俳句にすることで何かが生まれたのは確かです。暗黒の宇宙に星が誕生するように。星は輝き、その光ははるか彼方に届くのです。宇宙フォーラムの山中さんとよく話すのですが、『言葉は宇宙』です。すべてを表し、すべてを受け入れて、包んでくれます。そうだ。国語の課題ではない。提出先は、宇宙なのだ。」

【上】10月7日(土)バザーで販売する「宝珠山夢つくし」をバスに詰め込んだ生徒会は、JA筑前あさくら宝珠山支店を後にした。
13時、7月の大雨で被災した東峰村「つづみの里直売所」の被災現場に到着。土砂災害の怖さを思い知った。

そして、その本の中で私は、震災直後の5月に作られた一つの句に出逢った。

「逢いたくて　でも会えなくて　逢いたくて」(３年女子)

Ｓ先生は、「この句は、３年生女子が読んだ五七五です。母親を亡くした生徒なんです。」と、語っている。

「受験生　私の夢を　届けるために」(３年女子)

そして、11月の２回目の授業で、彼女は、この句を詠んだ。「普通は『夢をかなえたい』と詠むのに、『届けるために』。お母さんだな…」とＳ先生は思った。【次号に続く】

【左】15時、福岡県朝倉市高木コミュニティーセンター到着。センター長のＴさんに義援金を直接手渡し、復興の様子や７月の大雨の被害状況などの話を伺いました。

【上】「2017年（平成29年）九州北部豪雨から６年。その間、田畑や山、河川には常にトラックが行き交っていた。復旧作業がようやく終わりかけていた今年7月の大雨で、復旧工事はもう一年長引きそうである。今回この地域では流木による被害はなかったが、下流では大きな被害が出たところもある。今後少しの雨でも心配である。この6年間で人口が減少し、100戸程度までになってしまった。平均年齢も70となり、その高齢者が中心となって田んぼの維持・復旧活動を行っている。過去農業が盛んな地域だったが、若い人が住みつきにくい状況である。この課題を行政と一体となって解決していかなければならない。」とＴセンター長は語ってくださった。

「多くの学びを得たきずなプロジェクト」
生徒会書記　３年１組　Ｔさん

10月7日に行われた第5回きずなプロジェクトの視察。訪れた被災地の中でも特に印象に残っているのが、朝倉市高木地区だ。この地域は平成29年の九州北部豪雨で被災し、昨年も本プロジェクトによる支援を行って訪れた地域だ。前回の訪問の際には、来年には復興がかなり進むだろうというお話を聞いた。しかし、今年の7月、高木地区は再び被災。復興の現場も影響を受けた。そんな中での今回の訪問だった。しかし現地では決して諦めず、復興を信じて努力する人々の姿を見ることができた。そうした姿からは、支援を行う私たちの方がエネルギーを頂くことができた。

昨年、そして今年の二度のきずなプロジェクトでの活動を通して、私は多くのことを学ぶことができた。これからも、この学びを大切にしていきたい。

2023年9月撮影Ａ地点

2023年9月撮影Ｂ地点

2023年9月撮影Ｃ地点

「復興までの道」　３年４組　生徒会厚生委員長　Ｋさん

朝倉市高木コミュニティーセンターへ向かう途中、バスから外の景色を見て、昨年と比べてだいぶん道路の整備が進んだと思った。昨年はまだ道に流木があったり、田んぼが水害によってめちゃくちゃになったりしていたが、今年はそんな畑も新たに作物の栽培が始まっていた。

だが今年の7月10日の大雨により、一部の地域が孤立してしまったことを聞いて驚いた。9月ごろにはどうにか元通りになったと話されていたが、その分復旧に多くのお金がかかったらしい。

朝倉市は大雨の被害を受けやすい地域だが、水を使った伝統工芸品もあり、水は欠かせない。これからも朝倉市の復興に協力するため、本校のSDGs活動をこれからも続けていくべきだと思う。またこの経験を生かし、これからもこのようなボランティア活動に参加していきたい。

【左】9月13日（水）秀幸農園との事前打ち合わせの際撮影した高木地区の様子。河川の護岸復旧工事をほぼ終え、緑の田んぼが広がっていた。私は目頭が熱くなるのを感じた。【右】6年前の2017年九州北部豪雨の直後、11月1日に訪問した時に撮影した写真と見比べてもらいたい。濁流や流木、土砂の被害を受けた高木地区。

2017年11月撮影Ａ地点

2017年11月撮影Ｂ地点

2017年11月撮影Ｃ地点

「きずなプロジェクトで得たもの」
３年２組　生徒会体育委員長　Ｎさん

自分は最初、現地に行って何の意味があるのかと思った。でも実際に行って話を聞くと考えが変わった。朝倉市高木コミュニティーセンターの方の話や秀幸農園の鳥巣さんの話を聞いて、行ってよかったと思った。なぜなら去年文化祭で聞いた時とは受け取り方が変わり、みんなが見ていないところを自分たちは直接見ることができ、深刻な状況など細かい話を聞け、自分自身深く考えるようになったからだ。

鳥巣さんの話では、7月の大雨で被害を受けたが昨年よりも道路状況は改善された。しかし地区の高齢化や後継者不足の問題など、文化祭で聞くよりも現地に行って聞いたからこそ深く受け止めることができた。被災地の現状を直接見て聞くことによって、平和に暮らしていくありがたさも知った。そして将来このような被害を起こさないようにするためには、どうすればよいかを考えるきっかけにもなった。このような活動を、今後も継続していきたい。